

今年の8月15日が、戦後60周年にあたり、戦争を考える上で非常にメモリアルな日であることは認識しています。しかし、私のような若い世代（私は現在25歳です）は、一般的に「8・15」に強い思い入れを持っている訳ではないということ、敢えて言及しておきます。その上で、若い世代が「8・15」を迎えるに当たって何を思考するべきか、という視点から、書かせていただきます。

現在を生きる私たちの眼前には、アメリカ帝国主義を基本に展開される戦争があり、その土壌に引きずり込まれる形で、新たな日本の戦争が既に始まっています。01年の9月11日を契機に、私たち「アメリカ側」にいる人間は大きく変容しました。日本は以前より鮮明に、悪びれることなく自己防衛を名目に武装しています。これは、比喩ではありません。つい先日も日米両政府が、ミサイル防衛システムの地対空誘導弾パトリオット3を国内でライセンス生産することで合意し、05年度中に米ロッキード・マーチン社と三菱重工業がライセンス生産に関する契約を結ぶ見通しで、08年度から配備する予定だとのこと。狂っているのはブッシュ・小泉だけではないでしょう。アメリカと私たちは、9・11以後、アフガニスタンを攻撃し、イラクを侵略しました。これは、私たちの責任であり、私の責任です。イラクでは、最近の報告によると12万8千人以上のイラク民衆が殺されています。そして、日本は未だに自衛隊をイラクに

派遣し続けています。

一方で、「テロとの闘い」が、私たちの日常になっていきます。交通機関には「テロ警戒のため……」などというポスターが貼られ、ゴミ箱が撤去され、主要駅では警官が人びとを監視しています。テレビのワイドショーで連日のように放送される北朝鮮脅威論と金正日の変態ぶりのみが、多くの日本市民の北朝鮮を知る情報源になっていきます。教育現場では「日の丸・君が代」が強制され、教師が処分されている事例も少なくありません。一部の歴史教科書は日本のアジア侵略を肯定し、首

私にとっての8・15

高橋建吉

相ら多くの政治家が靖国神社に参拝し、若者が観光名所のように靖国神社を訪れています。衆院で審議入りした「共謀罪」に留まらず、様々な局面で表現の自由が制限され、想像力を削ぎ取られていく環境整備がされています。挙げればきりがありませんが、膨らみ続ける不安と制限状況の中で、私たちは危険を察することを無理強いされ、守るべきものを見失っていくように感じています。ですが、「こんな社会に、生きたくはない」と現状を嘆くだけでは、状況は変わりません。不安に支配される今日の社会は、大抵の場合、私たち自

身の問題に起因しています。世界の貧困を無くすために、戦争を起こさないために、まともな政治家を国政に送り出すために、時間と労力を割く必要があるはず。この数年間で、世界と日本は、劇的な転換点を迎えています。間違いなく「戦争の世紀」と言われた20世紀への、過去への後退です。

私は、ふと60年前の現在、衛生兵として戦地・中国にいた祖父の姿を思い浮かべます。祖父には一度も会ったことがありませんが、祖父が戦地で人を殺していなかったことを、信じたいと思うのです。若く、性欲に満ちた身体を、従軍慰安婦にされていた女性たちを強姦することで癒していたことなどなかったと、信じたいのです。だから、私自身が戦争を体験しないために、私は行動します。私にとって、祖父の姿を想像することは非戦を唱える最も大きな理由になり得ます。非常に私的な理由です。国際政治学など、アカデミックな視点を持ち込むことはできませんが、「非戦」の究極的論拠は、「記憶」にあると考えます。戦後60年しか経過していない日本においては、まだその究極的論拠で非戦を訴えることができます。

私が何度も訪れてきた在韓の元日本軍従軍慰安婦の女性たちが暮らす施設では、昨年来、次々に戦争被害の生き証人が亡くなっています。10年後の日本に、もう彼女たちはいないかも知れません。

（たかはし・けんきち、ブーメラネット、学生）